

特集

ESD 時代の外科治療

現在、内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は各地の施設で実施されるようになってきた。その多くは消化器内科で行っていると思われるが、ESD 実施後に外科で腸管を切除することになるケースもあり、また、ESD には消化管出血・穿孔などの合併症もみられ、ESD への外科医の関わりは決して少なくない。しかし、施設の状況に応じて ESD の適応や外科医の関わり方にも相違があるため、現場では「外科として ESD にどう関わるべきか」と迷う場面もあるようである。

そこで本特集では、領域別に各施設から、①ESD を実施する際の内科/外科の役割分担と連携、②ESD の適応をめぐって議論になりやすい点、③ESD 実施後に外科治療をする際にポイントとなっていること、を中心に、外科医の ESD への関わり方を報告していただいた。